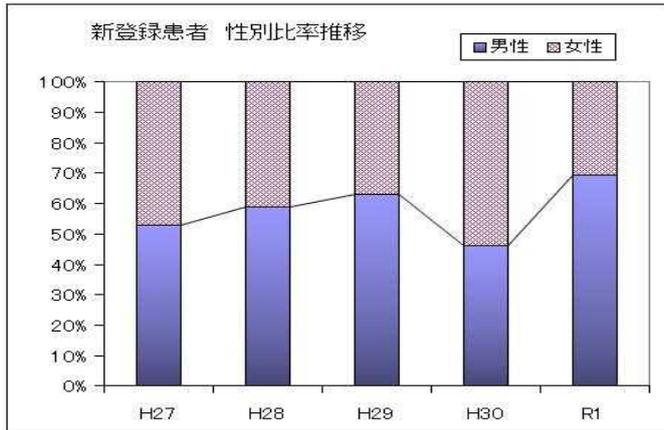


令和元年 結核登録者の状況

1 新登録患者数, 罹患率(表1)

区分	H27	H28	H29	H30	R1
新登録結核患者数	34	39	27	26	23
罹患率(人口10万対)	9.8	11.4	7.9	7.7	6.9
菌喀痰塗沫陽性肺結核患者数	15	10	13	11	8
喀痰塗沫陽性肺結核罹患率(人口10万対)	4.3	2.9	3.8	3.3	2.4
潜在性結核感染症患者数(初感染結核)	13	14	13	8	3

(図1)



(表1より)

令和元年新登録患者数は23人, 潜在性結核感染症患者数は3人であった。

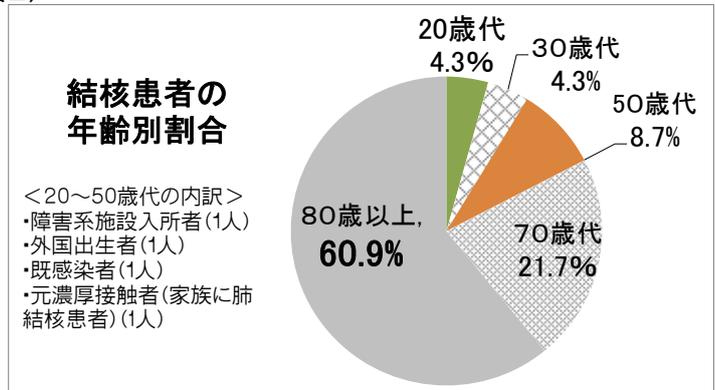
(図1より)

令和元年新登録患者性別比率は男性16人(69.6%), 女性7人(30.4%)と男性が女性の2倍以上となった。

(表2) 年齢別 結核罹患率

年齢区分	患者数	罹患率
9歳以下	-	-
10歳代	-	-
20歳代	1	3.7
30歳代	1	2.9
40歳代	-	-
50歳代	2	4.7
60歳代	-	-
70歳代	5	10.2
80歳以上	14	39.7
計	23	6.9

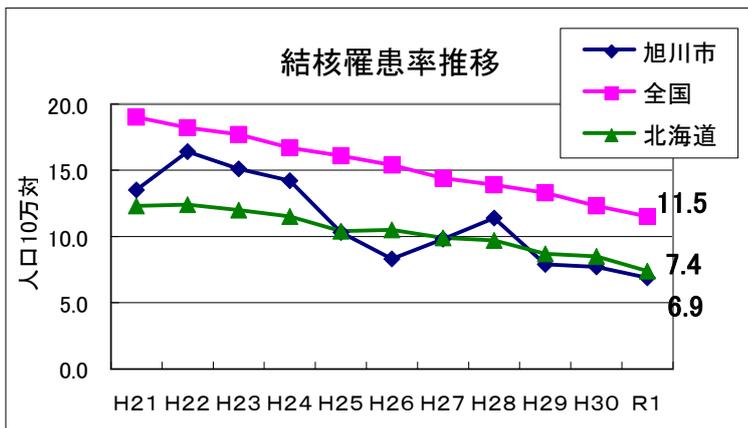
(図2)



(表2)(図2)より

年齢別罹患率は80歳以上が最も高く, 次いで70歳代が高く, 年齢別割合では70歳以上が82.6%と全体の8割以上を占めている。20~50歳代の若い世代については, 図2の内訳のとおり, 元濃厚接触者や施設入所者, 外国出生者等の発病リスクの高い者によるものである。

(図3)

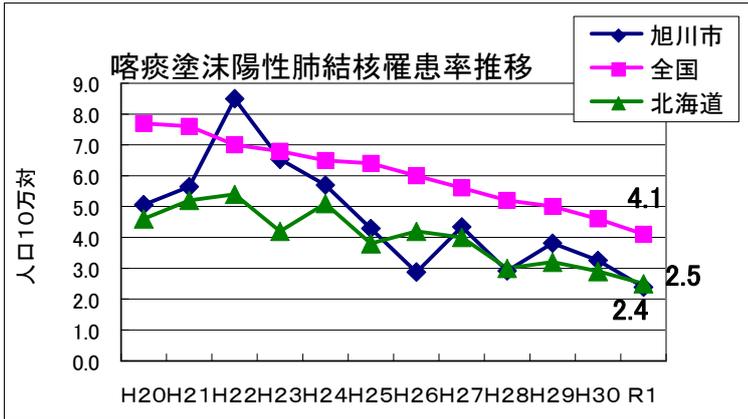


(図3より)

結核罹患率は平成22年以降年々減少し, 令和元年度は6.9と昨年に引き続き過去最低を更新した。低まん延とされる結核罹患率10未満を3年連続達成している。罹患率は全国, 北海道, 旭川市のいずれも減少傾向にあるが, 旭川市は全国, 北海道よりも低い罹患率となっている。

※参考: 札幌市 6.9

(図4)



(図4より)

令和元年の喀痰塗沫陽性肺結核罹患率は2.4(人口10万対)で、経年的に見ると減少傾向である。

令和元年は全国と北海道より下回っている。

※喀痰塗沫陽性肺結核: 患者の痰から多量の結核菌が排出されている結核のことであり、周囲の人達への感染源となりやすい

※参考: 札幌市 2.2

2 結核登録者数, 有病率

(表3)

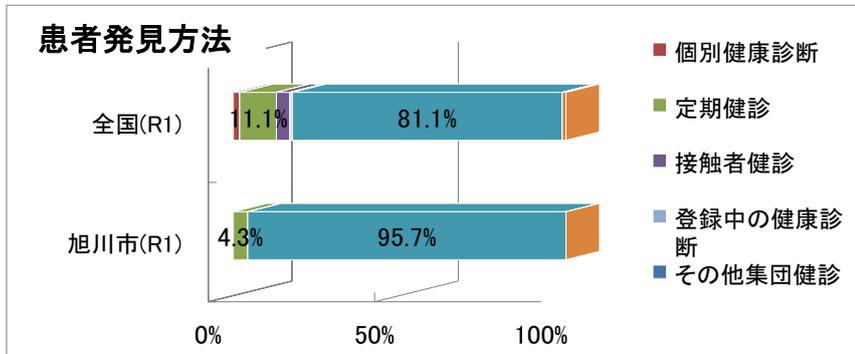
区分	H27	H28	H29	H30	R1
結核年末総登録者数	78	75	78	70	62
年末活動性結核患者数	30	24	20	21	13
有病率(人口10万対)	8.7	7.0	5.9	6.2	3.9
全国有病率(人口10万対)	9.9	9.2	8.8	8.3	7.7

(表3より)

令和元年末現在の結核登録数は62人であり、前年より8人減少した。うち、活動性結核の患者数は13人であり、前年より8人減少している。結核有病率は、前年から2.3減少し、3.9であった。有病率は旭川市も全国も減少を続けているが、旭川市はいずれの年も全国より下回っている。

3 新登録患者結核病類

(図5)



(図5より)

新登録患者23人の発見方法は全国と同様に、医療機関受診が22人(95.7%)と最も多く、次いで定期健診が1人(4.3%)となっている。

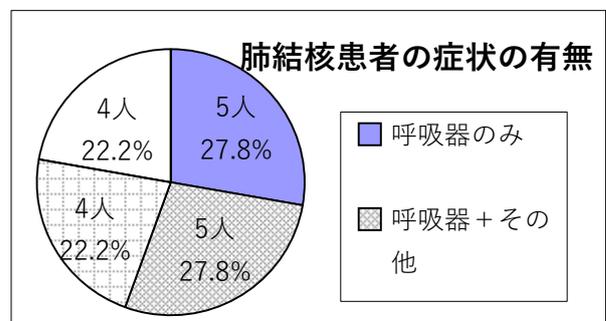
表4 登録時結核病類 ※新登録患者23人。複数診断あり

	病名	人数	割合
肺結核	肺結核	19	82.6%
	気管支結核	0	0.0%
	結核性胸膜炎	6	26.1%
肺外結核	粟粒結核	1	4.3%
	他のリンパ節結核	0	0.0%
	腎・尿路結核	0	0.0%
	皮膚結核	0	0.0%
	結核性心膜炎	0	0.0%
	その他の臓器結核	1	4.3%

(表4より)

新登録患者23人の結核病類は、肺結核19人(82.6%)であった。肺外結核では結核性胸膜炎が6人(26.1%)、粟粒結核とその他の臓器結核がそれぞれ1人(4.3%)であった。

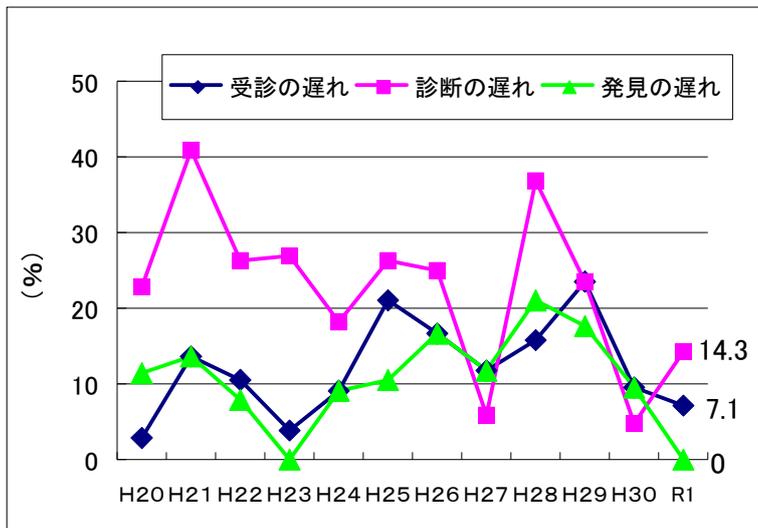
(図6)



(図6より)

肺結核患者18人うち14人(77.8%)が有症状であり、呼吸器症状があったのは10人(55.6%)となっている。

4 新登録有症状肺結核患者の受診・診断・発見の遅れ (図7)



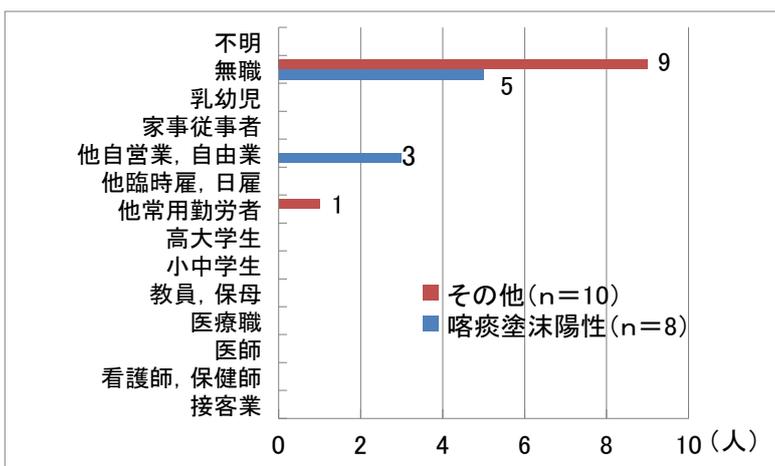
(図7より)

有症状肺結核患者14人のうち、発病から初診までの期間が2か月以上(受診の遅れ)の者は1人(7.1%), 初診から診断までの期間が1か月以上(診断の遅れ)の者は2人(14.3%), 発病から診断までの期間が3か月以上(発見の遅れ)の者は0人(0%)となっている。また、発病時期が不明であった者は14人中3人(21.4%)であった。

全国との比較では、いずれも全国より低い割合となっている

※参考: R1 全国 受診の遅れ 20.4%
 診断の遅れ 20.9%
 発見の遅れ 21.7%

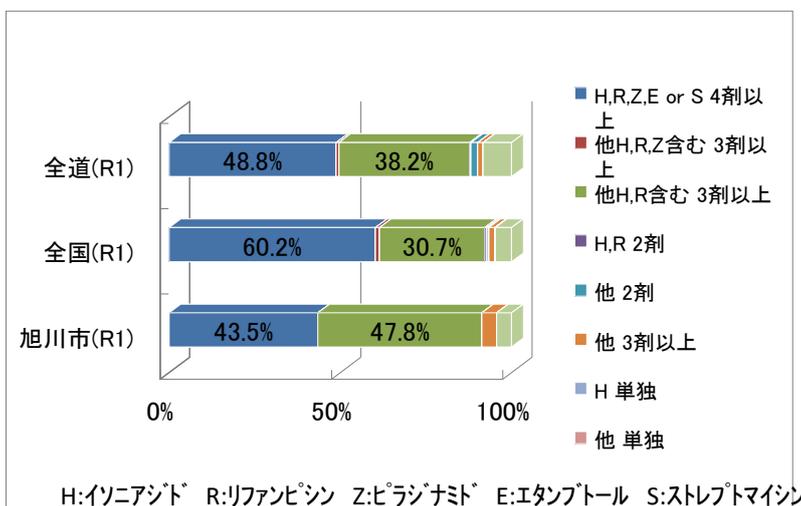
5 新登録肺結核患者 登録時職業 (図8)



(図8より)

新登録肺結核患者18人の登録時職業は無職が14人(77.8%)と最も多く、18人のうち15人が高齢者であった

6 新登録患者化療内容 (図9)



(図9より)

新登録患者23人の化療内容はH,R,Z,E or S4剤以上使用していた者が10人(43.5%)と昨年の6人(23.1%)より増加。他H,R含む3剤以上使用していた者が11人(47.8%)と最も多い。これは患者が80才以上の割合が高く、ピラジナミドを使用できなかったことによると考えられる。

またR1は、全国・全道と比較して標準治療を行えた者の割合が高くなっている

H:イソニアジド R:リファンピシン Z:ピラジナミド E:エタンブトール S:ストレプトマイシン

7 薬剤感受性試験結果
(表5)

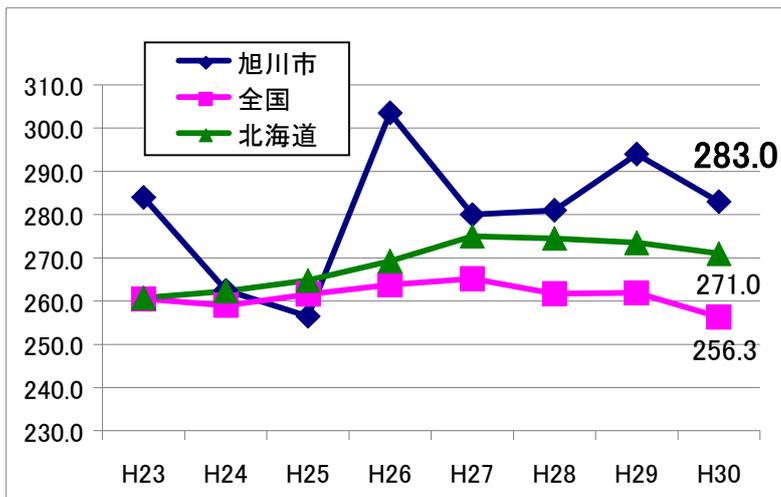
	人数	割合
結核菌培養陽性患者	12	
薬剤感受性試験実施者	11	91.7%
HR耐性	0	0.0%
SM耐性	0	0.0%
HRSE全てに感受性	11	100.0%
薬剤感受性試験未実施者	1	8.3%

(表5より)

新登録肺結核菌培養陽性患者12人のうち11人(91.7%)に薬剤感受性試験を実施し、11人全員がHRSE全てに感受性があった(1人LVFX耐性)。

未実施者1人は診断医療機関においては培養陽性であったものの、治療医療機関では全て培養陰性であったため感受性検査が実施できなかったものである(診断医療機関は感受性検査は実施しなかった)。

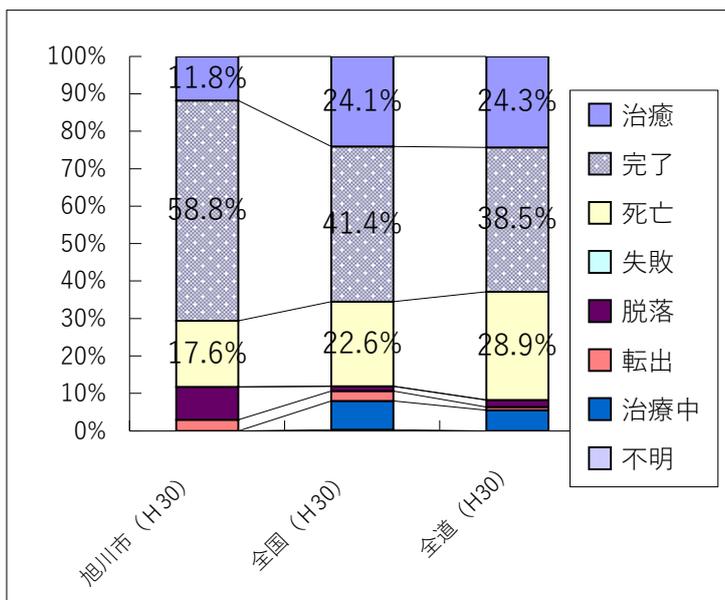
8 平成30年全結核治療完遂継続者治療期間中央値
(図10)



(図10より)

平成30年新登録患者の全結核治療完遂継続者治療期間中央値は283日と、前年より減少したものの、全国・全道と比較すると長くなる傾向にある。要因として、旭川市は高齢者の患者が多く、副作用等により減感作療法を実施した結果、治療期間が長引く結果となったことが考えられる。

9 平成30年新登録活動性結核患者 治療成績
(図11)



(図11より)

平成30年新登録活動性結核患者34人の治療成績において、治癒は4人(11.8%)、完了は20人(58.8%)で、治療成功率は70.6%であり、全国・全道より高い割合であった。

また、死亡が6人(17.6%)のほか、脱落3人(8.8%)、転出が1人(2.9%)だった。

失敗は0人で、特定感染症予防指針の目標値である5%以下を満たしていた。

※脱落3人の内訳

(肝機能障害1人、関節痛1人、血小板減少1人)